36

18，19世紀のフランスにおける鍼灸医学の受容について

ヴィグル・マティアス
二松学舎大学

17世紀後半から19世紀前半にいたるまで，バタヴィアと日本に駐在したブショフ，ライネ，ケンペル，シーボルト等オランダ東インド会社の医員の観察，あるいは中国に駐在したイエズス会士の書簡と論文によって東洋医学がヨーロッパに紹介された。しかし，鍼灸の場合は西洋人によって同一方法として評価されなく，国によってその受容過程は同じではなかった．例えば，オランダとドイツでは，灸法が17世紀末の大きな病の一つである痛風に抗する新たな治療法の研究に取り組んでいた時代に，オランダとドイツには学者が多くの実験を行い，学士院でモグサの効果と作用について討論したのに対して，鍼術は学者の興味を引いてこなかったようである．当時のフランスの場合は，学士雑誌，王立科学アカデミーの報告書などを見ると，18世紀後半までに鍼灸は多くの反応を引き出さなかった。1750年に年周賞の際にも王立外科アカデミーが焼灼法について課題を提案した後焼灼法が再評価されたにもかかわらず，臨床においては直接影響がなかった．実際，フランスでは焼灼法の使用の改新を見られるまで，王立外科アカデミーの年周賞の20年後のプトーの研究発表を待たなければならない．彼がエジプトの焼灼法を再評価した結果，フランスの医師は忘れ去られていた古代から存在している西洋の治療方法を日常臨床にもう一度取り入れた．しかし，当時医師は皆プトーが唱えたエジプトの焼灼法を賛成したわけではなく，焼灼を行うための最も適応な原料についての討論が多くあった．そこで，興味深いのは古代の焼灼法が改新された結果，フランスでは焼灼法を一般に「モグサ」と呼ぶことになった。また，1800年から30年間ぐらい，焼灼術の総称となったモグサについての論文の出版数を見ると，この方法はフランスで流行っており，公衆病院でも使用されるようになった．医師の中で，プトー医師のようにエジプトのコトンーの信奉者もいれば，サランディエール医師のように日本のヨモギの信奉者もいた．ラレー医師はティチングによって日本から持って帰った経絡図を表す人形を基にして，モグサを据えるべきなところを示す図も作成した．鍼術の場合も1810年に西洋医学で治れない患者の患いに困った医師が最終手段として初めて使用された数年後，鍼術は他の医師に試され，公衆病院で「痛み」の治療として流行ることになった。最盛期として1820年から1830年まで鍼術についての論文が多く出版された．1825年に日本の『鍼灸極秘伝』のフランス語版が出たことによって，日本の鍼術の臨床がフランスに紹介された。本発表では，当時出版された論文に基づきながら，17世紀後半18世紀前半に至るまでフランスにおける鍼灸の受容について研究したい．とりわけ，オランダ東インド会社の医員が紹介した日本の鍼灸と，18世紀のフランスにおける鍼灸の実態を比較し，電気鍼術の創造などフランスの医師はどのように日本から伝われた鍼灸医学を改新したのかを検討したい．